



ガイドスタッフT

オチ オサム 《出口ナシ》 1962/2015

2つの黒い物体にあるガラスで覆われたくぼみ。
ぐぐっと視点を落として眺めてみてください。
灰色の空間には一対のガラスがあり、それぞれの
底面に張られた鏡が互いのガラスを無限に反射
しています。

改めて作品全体を見渡すと、2つの黒い物体はその
重なり具合から「上に登ろうとしているのに下に
降りてしまう」出所のない場所にいるように感じる
不思議な作品です。当時、作者が展覧会への出品
謝礼が少なかったことに失望し制作されたという
この《出口ナシ》、視点を変えると他にも新たな
気づきがあるかもしれません。

藤川栄子 《かける》 1960



ガイドスタッフY

「かける」とは「駈ける」？「掛ける」？ はたまた別の？ 画面左奥には衣桁らしきものが描かれており、どうやらこれは掛けられた着物らしいと分かります。藤川栄子は、戦後活躍が目立つようになった女性作家の一人です。1953年初めて訪ねたパリで、ピカソ本人と交流し感銘を受けた事は彼女に新しい画風をもたらしました。平らな布である着物を平らな画面に立体として描く手法。「扇面流し」という水に流れる扇の古典的な吉祥模様の和服をモチーフに、現代的な手法で描いたこの作品。おしゃれだったという藤川栄子の個性を感じます。

白髪一雄 《無題（赤蟻王 王のシリーズより）》
1964

まずは画面をじっくり観察してみましょう。遠くから見ると平らですが、近くから見ると…。ずいぶん絵具が盛り上がっていますね。つややかな油絵具の線からは、すばやく描いたスピード感が伝わってきます。

この作品はなんと、「足」で描かれました。床の上に寝かせたカンヴァスの上に天井からロープを垂らします。作家はロープにつかまって、絵具をたっぷりつけた足でカンヴァスの上を滑るようにして描いています。まさか？と思いますよね。足跡もありますよ。探してみてくださいね。



中西夏之 《洗濯バサミは攪拌行動を主張する》
1963

1962年に、高松次郎、川仁宏らと《山手線事件》と称した、電車内や駅ホームで行ったパフォーマンスで一躍注目されました。

1963年には、「読売アンデパンダン展」にカンヴァスから出た紙紐にアルミ製の洗濯バサミを大量につけた本作品を出品。当時の展示では洗濯バサミがカンヴァスの枠を超え周りに展示された下着や卵のオブジェにまで拡がっていました。床に置かれた洗濯バサミを何気なく持ち帰ってしまう鑑賞者もいたそうです。洗濯バサミがわずかに絶えず動いて人知れずカンヴァスの外へ出てしまうような作品だったのですね。



齋藤義重 《作品》 1963



ガイドスタッフT

カンヴァスは使っていません。合板という板に茶系の絵具を乗せ、表面には荒々しい線や穴が見られます。電動ドリルで彫ったのです。え？ドリルを使っているの？ はい、新しい方法にチャレンジしているのです。不安定なドリルの動きは制御しづらく、それが思わぬ線を生み、新鮮な効果をもたらしています。

齋藤義重は平面や彫刻というジャンルを超えたさまざまな作品を生み出し、戦前戦後の前衛美術を牽引しました。多摩美術大学での齋藤教室は学生たちに大人気だったそうで、後の「もの派」と呼ばれる作家たちをも輩出したのです。

清水 晃 《色盲検査表 No.5》 1963



ガイドスタッフO

この作品の中に、数字が隠されています。

少し離れて見てください。分かりましたか？これは色盲検査表です。今度は近づいて見てください。数字が分からなくなった代わりに、男性の気を引くような写真が散りばめられています。これはアメリカの人気雑誌「プレイボーイ」の切り抜きをコラージュしたものです。作者は薬局で見かけた色盲検査表がヒントになり、この作品を作ったといっています。目先の雑念に気を奪われて、肝心なものが見えなくなっていないませんか、まるで作者にからかわれているようですね。

田中敦子 《作品（たが）》 1963

大阪駅前。まばゆいほどの街のネオンを見た時、田中敦子は「この光を身にまとってみよう！」と考えます。その考えは何色にも塗り分けられた約190個の電球とそれをつなぐ無数のコードとでできた《電気服》という作品となり作家自身が着てスイッチを入れるとピカピカと光を放ちました。その服のための配線図はやがてこの作品のように大小の円とそれをつなぐ線の表現となってキャンバスに描き続けられました。絵具にも《電気服》の光を再現しているかのような工夫がありますね？



ガイドスタッフ



福岡道雄

《何もすることがない 僕達がピンク色の女王の
アドバルーンとなるとき》 1962-65

立ち並ぶいくつもの棒。宙には何やら薄汚れた、
人魂のようなものが…。

この作品を見たとき、あなたはどんな印象を受け
ましたか？ タイトルもなかなかインパクトがあり
ますね。「するものもないというのか、でも何か
しないといけないという意識」を抱え、廃品に
ポリエチレンをかぶせて作り続けたこの棒たちを、
作家は「今にもこけそうに立つ」人に見立てて
います。そしてピンクは願望や夢といった、きれい
なものを表しているそう。「混沌の状態から脱出
しなくてはならない」「空中へ舞い上がらねば」
そんな作家のものがきが感じられませんか？

岡本信治郎 《東方三賢王の礼拝（聖風景シリーズ）》
1964

カラフルな絵本の様な絵画ですね。緑、赤、黄色の不思議な形。ラッパ？ マンガやアニメのヒーローかしら？ これは三賢王（三賢人）です。イエス・キリスト誕生時にその場で祝福したとされる3人です。ギザギザは冠、上部の細長いものは光のようにも見えます。アクリル絵具で明るくポップに描きました。岡本さんの作品にはユニークなキャラクターが登場し、文字が書かれているものもあります。見て、読んで、笑う絵画としてすみずみまで楽しめるワンダーランド！ ユーモアいっぱいの世界の向こうに作家の深い思いが見えるかもしれません。



篠原有司男 《思考するマルセル・デュシャン》

1965

えっ何だ！？青い地に「人形」が描いてあるよね。これには、実物があって、それも大きなハリボテ人形なんだ！しかも、その頭はモーターでグルグル回転したらしい。この絵はその人形の青写真（設計図）みたいなものといえるね。モヒカン頭でも有名になったこの作家（愛称：ギューちゃん）は、日本に来ていたアメリカの著名な現代美術作家（ロバート・ラウシェンバーグ）に、このハリボテ人形と一緒に公開質問状を読み上げて、現代アートでの戦いを挑んだんだよ！



ガイドスタッフ M

ロイ・リキテンスタイン 《ヘア・リボンの少女》
1965

これマンガじゃないの？ コミック・マンガの一コマみたいな女の子が描かれているけど、そこがミソなんだ！「顔の影」の部分を見てみて。丸いドットがたくさんきれいに描いてあるよね。マンガは印刷物だから影を表す方法として、網点（ドット）を利用したりするけど、この絵は、マンガのその特性を取り入れているよ。他にも、女の子をモチーフにしたり、3原色（赤・青・黄）を使ったりして、「みんながよく知っていること（日常性）」を絵画に取り入れているんだ。



ガイドスタッフ M

横尾忠則

初期絵画作品について

《歯磨き》も《花嫁》も、1966年当時、グラフィックデザイナーとして活躍していた横尾が初めて発表した絵画作品です。私のように昭和の子どもたちならば、神社のお祭りを賑やかしていた見世物小屋の看板絵を思い起こす色彩と表現に似ていると感じるかもしれません。あるいはお祭りで遊んだ「型抜き」をこの女性たちの肌の色から連想されるかたもいらっしゃることでしょう。

こうした懐かしい色彩が欧米発のポップアートと通じるという点が興味深いですね。



ガイドスタッフ Y

ゲルハルト・リヒター 《エリザベート》 1965

まるでモノクロ写真をみているかのようなこちらの作品。雑誌のある部分をキャンバスに描いたようにもみえます。しかし、よくみると写真をそのまま再現したわけではなく…写真では、はっきりとみえたであろう彼女の笑顔がぼやけて描かれており、写真とはまた違う印象で私たちの目の前にうつっています。

カメラの登場は、絵画の歴史にも大きな影響を与えました。現在はスマートフォンで簡単に撮影できる時代で、美術作品も絵画以外に映像など多様化しています。90歳を迎えたリヒターは、現在も絵画の可能性に挑戦し続けています。



平田 実による一連の写真について



ガイドスタッフH

今、スマホお持ちですか？今日はこんな作品
見ましたとかツイートしますか？

平田さんは1960～70年代に若い美術家達が
アトリエを飛び出しておこなったハプニングと
呼ばれるパフォーマンスをたくさん撮影しました。
今みたいに誰もが自分が見たものを発信出来る
わけではなかった時代に記録として当時の様子が
見られるのは凄いことですね。平田さんは若い
美術家達ととても仲が良くていつも「電話」で
呼び出されていたそうです。

山口 勝弘 《C の関係》 1965



ガイドスタッフ F

光るアート作品は今でこそめずらしくありませんが、実はこの《C の関係》が日本における最初のライト・アートであり、光によってパフォーマンスをする彫刻として制作されました。光る「C」と光らない「C」。赤い「C」と透明な「C」。正立した「C」と左右反転した「C」。下にランプがあることは同じで、どちらも明滅を繰り返し、たがいに呼びかけあっています。アクリルでできたふたつの「C」。これらは対照的でありながら、切っても切れない互いの関係性を表しているようです。

三木富雄 《EAR》 1965



ガイドスタッフU

1962年に粘土や新聞紙で成形した上に石膏を塗布した最初の耳の作品《バラの耳》を、翌年にはアルミニウム合金で鑄造された耳の作品を発表。以後、様々な耳の作品を制作しますが、そのほとんどが左耳です。

本作は三木の代表作です。素材はアルミニウム合金で、グラインダーで磨かれた鈍く輝く拡大された耳の作品です。彼は友人宅で、突然何メートルにも耳を拡大させるという思いにとりつかれたと語っています。「耳が私を選んだ」として、死去するまで耳の作品を作り続けました。

多田美波 《周波数 37306505》 1965



ガイドスタッフO

銀色に輝く 6 個の半円球。当時は珍しいアルミニウムとアクリル樹脂、鉄を用いた彫刻です。ちょっとデコボコですね。鏡の様な表面に他の作品と一緒に映っているのはあなたの姿です。照明に照らされたキラキラの笑顔が見えましたか？動くと太ったり細くなったりします。作品の一部になる嬉しい体験ですね。

1962 年多田さんは研究所を作りました。新素材の加工・技術開発をするこの場所で多くの立体作品が生まれました。光や周囲の景色を映す美しい作品は、ホテルや野外空間などでも出会えるでしょう。

工藤 哲巳 《若い世代への賛歌—繭は開く》

1968

まゆから飛び出した巨大な脳みそ。かすかに聞こえる赤ちゃんの泣き声。バギーを押すのは、パラソルと「若い世代への賛歌」と書かれたスーパーの紙袋をもった、皮のような人物。パリで五月革命を目の当たりにし、権力や古い体制に反発して平等や性の解放を訴える若者のパワーに感激した工藤は、学生による反戦デモが激化していた東京に一時帰国し、新宿駅前でこの作品を引っ張ってまわった。工藤自身が「コミュニケーションのための材料」と定義する彼の作品は、置かれた場所や観る人によってさまざま解釈を生み出す。あなたは何を思う？



中村 宏 《円環列車 A（望遠鏡列車）》 1968 年

作品の正面に立って、ご自分の手で丸を作って望遠鏡のように目に当てて作品の丸に重ねて見てください。そうです、真ん中の円形は望遠鏡で見た遠くの風景を描いています。このようにこの作品では「観る」という行為を意識させられますね。

さて、作品をよく観るとどうやら汽車の車内のようです。一つ目のセーラー服の女子高生たち。かなりインパクトがありますね。頭上の棚には荷物がいっぱい。ドクロがカバンから覗いています。



ガイドスタッフ Y



ガイドスタッフ M

菅井 汲 《太陽の森》 1967

○△□の幾何学的形態。緑、青、黄色など、限定された色数で鮮やかに描かれた作品。《太陽の森》というタイトルから、緑色の○部分は、森の木が風で動いているようにも見えます。黄色は昼の光、青は夜の闇でしょうか。すっきりとした画面に、どこか清々しさも感じる作品は、菅井独自のスタイルです。

余談ですが、作者の菅井は朝、昼、晩、毎日決まったものを食べていたそうです。メニューを考える時間を省き、その分、作品のことを考えていたようで、自身の作品と同じように、生活にも独自のスタイルを確立していました。

横尾 忠則 《葬列Ⅰ》《葬列Ⅱ》 1969

制作当時に公開された南仏が舞台の映画「太陽が知っている」（ジャック・ドレー監督）の葬列の場面から引用した作品です。横から見ると版画の版をピッタリではなく、隙間があるように重ねてあるのがわかります。奥の明るい青と緑で一色に刷られた背景と、くっきりとした手前の参列者。描き方の違いのせいなのか、なんだかもやっとした夢のような、現実離れた浮遊感を感じませんか。私はこの作品を見て、自分が葬儀に参列して、頭と心が現実に追いつかなくて、夢で映画を見ているような気がしていたのを思い出しました。





ガイドスタッフ Y

新潟現代美術家集団 GUN

《雪のイメージを変えるイベント》写真パネル

1970/2000

雪は美味しいお米を育みますが、豪雪地帯で暮らすと人の命を奪いかねない危険性を含んだ自然現象だと実感します。その一方で、吹雪の翌朝、足跡ひとつない雪原は朝日を浴びてキラキラ輝く純白のキャンヴァスのよう。雪原で麻の上布をさらす新潟の冬の風景は、ストライプの絵画のようにも見えます。

そんな新潟を拠点に活動した GUN（ガン）のメンバーが雪のイメージを壊すように、雪原に巨大なカラフルな抽象画を描いたのもうなずけます。この様子を目撃した住民たちの「こんげガンが芸術かね（これが芸術なの？）」といった新潟弁のつぶやきが聞こえてくるようです。

高松次郎 《扉の影》 1968

描かれているのは、ドアをあけた向こう側、そして人影。影だけなら絵かな、と思うけれど、リアルなドア、そのドアノブをにぎっている男性の影をみていると、つい本物の人をさがしたくなります。そしてドアの内側と中に見える男女の影は、どうやら同じ人のもののようです。ドアをあけて出会った二人、どんな会話をしていたのでしょうか。実際の人を描かず影だけを描くことで、逆により強く登場人物を印象づけられますね。



ガイドスタッフ A



嶋 剛 《HOUSING D74-2》 1974

ガイドスタッフK

巨大な団地がモチーフの作品。それも1点ではなく2点。左右を見比べ、違いを探してみると、影の形から洗濯物までほとんど同じ。ただ、向かって左の作品には、真ん中の辺りに紙のつなぎ目…。実は左の作品、右の絵を撮影した写真なのです。大きさも見た目も同様な、「写真のような絵」と「絵のような写真」が並ぶことで、「絵」と「写真」の違いとは何、との問いが生じます。ただ、1974年の制作から50年近く経ち、左の作品の色が少しセピアになっています。時の経過が2つの違いを現し始めているのかもしれませんが。

麻生 三郎 《自己像》 1974



ガイドスタッフY

これは麻生三郎の《自己像》という作品です。え？《自画像》じゃないの？麻生は《自画像》という題の作品も複数描いており、例えばその一つからは若者らしい挑戦的な表情が見てとれます。一方この作品はどうでしょう。じっと見ていると顔が見えるような気もしますが、どこが目なのか口なのか。麻生が描いた人物像は、戦後、次第に抽象的に見える色の塊として画面が構成される様になります。この自己像から浮かび上がるのは作者の内面か、見る人の内面か。一見捉え難い彼の絵画は、時間をかけて見れば見るほど多くを語りかけてくるようです。

齋藤 義重 《「反対称」対角線 No.1, No.2》 1976

齋藤が1963年に制作した《作品》は合板をドリルで描くように刻んだ抽象絵画的な作品でしたが、1976年制作のこちらの作品は、壁にかけられていて、レリーフ的です。なにかを梱包しているように見えますが、中は空洞。実際、梱包材料の板を使っています。線対称の一对の立体から成り立っているように見えます。パッと見にはわかりにくいのですが、実は違いがあるので完全な対称ではありません。齋藤はこれを「反対称」と呼んでいます。違いを探してみてくださいね。



ガイドスタッフ Y

李 禹煥 《点より》 1974



ガイドスタッフ N

青い点が左から右へだんだんかすれていきます。少しずつずれて、同じ繰り返しはありません。作家は、日本画用の岩絵具を含ませた太い筆を押し付け、一点一点描いているのです。息を整えて、集中し、ゆっくりしていねいに。完成までどのくらい時間がかかったのでしょうか？

現在、世界的に活躍する韓国生まれの李さんは、幼い頃に伝統の書や画を学びました。筆で「点より」出発することは、彼の原点なのかもしれません。力を入れたり、抜いたりする筆の運び方に、作家の身体の動きや呼吸までも感じられるような気がします。

福島秀子《Whither Blue (V)》 1982

福島秀子は、メディアアーティストの山口勝弘などさまざまな分野の芸術家とともに、ジャンルにとらわれない芸術を求めて実験工房を結成した。彼女にとって“水”は人間の意識の根源であり、“青”はその“水”を彷彿とさせ、そして“円”は生まれては消えていく泡のように、生命を表す記号だそうだ。辞書によると、“Whither”とは“where”の古い言い方らしい。70年代から制作された“青”シリーズのひとつであるこの作品でも、流氷の割れ目のように、どこまでも続くような空間が感じられる。



ガイドスタッフF

桂 ゆき 《作品》 1978-79



ガイドスタッフ Y

人が分け入っていない場所の落ち葉か、冬の早朝の霜柱のように、思わず触れてクシャっとしたところが想像されるような画面です。奥の方から覗く紅色も、着物の裾からちらりと見える色の様に効いています。桂ゆきは20代だった戦前、それがコラージュという技法だとも知らずに、気持ちのままに捨てられていたコルク栓を板に貼り詰めた作品を作りました。そして、時は流れて66才になった桂ゆきの、この《作品》。空気を含んだ画面は絵画か、彫刻か。きっとこの時も思うままに手を動かしたであろう彼女にとってはどうでもいいことだとは思いますが…。



ガイドスタッフ K

横尾忠則 《滝》 1982

激しく飛び散る水しぶき、紅潮する肌。体へのしかかる水圧の強さと冷たさがうかがえます。がちり組まれた手と一点を見つめる目には、強い意志が込められているように感じます。

この作品は、グラフィックデザイナーとして活躍していた横尾忠則さんが、画家に転身することを決意した2年後に描かれた一点です。以来、自由自在にスタイルを変えて、独自の表現を追い求め続けている横尾さん。2021年に当館で行われた個展では、この作品も含めた600点以上もの作品が展示され、その色鮮やかな空間にみなぎるパワーに圧倒されました。

彦坂 尚嘉 《PWP35 若葉》 1980-81

難しげな作品名は「プラクティス・ウッド・ペインティング」シリーズの35番目、そしてその愛称「若葉」を示します。そう、これは立体物ではなくペインティング（絵画）なのです！作家は支持体に紙や布ではなく木を選びました。絵具の付き具合、視覚的な強さがその理由といます。PWPシリーズ初期の作品は、これと異なり明るい色に塗られた板を並べたものでした。



ガイドスタッフF

菅 木志雄 《界の仕切り》 1982

一見するとキッズパークの遊具のようです。切り出したままの丸太でできていて、カットした部分を連結したシンプルな作品です。横になった部分を立てれば元の丸太に戻ります。

1960-1970年代、工業製品が大量生産されていた時代に、菅は出来るだけ素材に手を加えず、素材そのものを使い、展示する空間全体を作品にしました。毎年どこかの美術館で個展が開催されるほど、現在も精力的に制作を続けています。



リチャード・ロング

《イングランド・ジャパン・サークルズ》 1981

子どもの頃、自然の中に身を置いてただ無心に遊んだ記憶はありますか？鳥の声を聴き、歩きながら花を摘み、石や小枝を拾い集める。そしてぐるっと丸く並べてみる。こうして見ているだけで、円は不思議と私たちを心落ち着く空間に導いてくれます。

リチャード・ロングは絵具やカンヴァスの代わりに自然の中を歩きながら材料を集め、ランドアートと呼ばれる作品を制作します。イングランドで集めたスレート石が、古代遺跡や禅の思想にも見られる円形に並べられています。自然と対話する方法を私たちに示してくれているようです。



ガイドスタッフT

デイヴィッド・ナッシュ 《門》 1982

森の中で長い間生きてきたこの木は、台風で倒れてしまいました。制作にあたってナッシュはその木があったところに足を運び、作品を構想したそうです。奥日光の森の光や空気を感じながら制作したかったのかもしれませんが。元の木をの形を生かして制作されたこの作品は、自然が作り出す木の幹の豊かな曲線と、チェーンソーが作る人工の直線の対比が印象的です。人が生きていくために自然とどうかかわるか、そんなことを考えさせる作品です。この門をくぐった向こうでナッシュが見たかったのはどんな世界だったのでしょうか。



杉本 博司 「劇場」シリーズについて

このシリーズのスクリーンは全部真っ白だ。真っ白なのは、映画一本分の間カメラのシャッターを開けっ放しにして撮影したからだそうだ。カメラも観客のようにその映画をずっと見ていたと思うと私はなんだか腑に落ちたよ。それは映画から受けた感動や衝撃を、一片の画像やひとつの言葉で切り取って人に伝えるのは難しく、どんなに沢山話をしてても全部を伝えられない気が私するから。そんなものがいっぱい詰まっているからスクリーンは白くて、私たちの気持ちをも投影させてくれるように感じるよ。



笠原恵実子

《Untitled -石の花-》 1991



ガイドスタッフS

タイルとガラスのケースに大理石の薔薇が保管されています。作品のモチーフとなったロシア民話「石の花」は、俗世を捨て創作に没頭する石工の物語です。作家は、石と格闘して世界にたった一つの作品を造りあげるといふ、彫刻のマッチョな側面に疑問を抱いていたそうです。物語の中の「石の花」を「現実から切り離され、意味が欠落した彫刻の象徴」ととらえ、「石の花」を再現するために、あえて作家の手の痕跡をなくしたかったといいます。今まで求められた価値を手放すことで開かれる新たな世界への挑戦だったのかもしれない。

剣持 和夫 《無題 1991》 1991



ガイドスタッフH

この写真に写されている空間は過去に作者が立体作品を作った時に使った製鉄工場です。

この作品は写真ですが、ただプリントされただけでなく、良く見ると表面にキズがつけてあり、油絵具で絵を描くようにというよりは汚しを掛けるように塗られています。

過去に作品を作ることにより時間を共有した場所に更に積もっていく時間と記憶を表現するためにはつるつるとした写真の表面にざらりとした手触りが必要だったのかもしれませんが。

遠藤 利克 《泉》 1991

目の前にまっすぐ伸びる長い黒い物体には、丸いあながあいています。暗い部屋にあるので、地下にうめられた管のようにもみえますね。タイトルは『泉』、ですが水らしきものはどこにも見当たりません。制作のようすをビデオでみることができますが、この作品はくりぬいた木の幹をもやし炭にしたものです。木は根で土から吸い上げた水を幹から枝、葉に送ります。かつては水の流れていたことをタイトルから想像しました。みなさんはどう感じられましたか。



ガイドスタッフ A



ガイドスタッフK

蔡 國強

《Project for Extraterrestrials No.8—烽火台を再燃する》

1991

この絵画は、万里の長城に烽火をともすというプロジェクトの計画図です。かつて辺境の地から都への急の知らせは、烽火を中継することで馬よりもいっそう早く容易になりましたが、争いによって広がるのは荒廃する景色ばかり。人々にとって重要なのは自然保護と共生であると作家はうったえます。彼は「福建前線」とよばれた台湾と海峡を挟んだ中国の港町に生まれ、文化大革命の厳しい専制時代に育ちました。日本への留学、アメリカでの生活から様々な文化を背景に、火薬という中国伝統の表現を用い、国や地域を超えた普遍性を描いています。

※烽火とは…のろしを上げること。

宮島 達男 《Life Face vol.3 ①～⑳》 1991

この作品は1つの版から作られた100点のシリーズのうち20点です。版画は1つの版から同じものが複数枚できるのがその特徴ですが、この作品では、ランダムに決まった16桁の数字の形にその都度マスキングすることで、100の異なる数が描かれています。紙面には凹凸によって「8」がエンボス加工されています。作家の代名詞ともいえるLEDのデジタルカウンターを使った作品は、1から9までの数がそれぞれの速さで刻まれ、0は表示されず明滅がやんだ後に再びカウントし続けます。この版画作品は刻々と変わるその一瞬をとらえているかのようです。



トミエ・オオタケ（大竹富江）《Untitled》 2008

ゆるやかに、のびやかに、自由に進む白い曲線。「見る人の感じ方を大切にしたい」と作品に題はつけなかったそうですが、あなたはどんなイメージをもちましたか？

オオタケは 1913 年京都で生まれ、ブラジルへ移住。独学で絵を描き始め、幾何学的な抽象絵画や彫刻を制作し、2015 年に 101 歳で亡くなるまでブラジルを代表する作家として活躍しました。

大正生まれのハイカラ女性が遥かブラジルで好きな道を極めて成功を修める、なんて素晴らしいのでしょうか！その精神が作品にも表れていると思いませんか。

ガイドスタッフ T



アルナルド・ポモドーロ

《太陽のジャイロスコープ》 1988



ガイドスタッフ I

ジャイロスコープは船や飛行機の針路を定める時に使われる道具です。絶対の安定性と信頼性が求められます。作品を見てみましょう。とても力強く、合理性を感じます。でも気付きましたか。そこにある鋭い裂け目に。作者のポモドーロによれば、この裂け目は深層意識を表現しているのだそうです。合理性と深層意識が共存しています。この作品を見ると私は自分の人生を思います。岐路に立ち人生の針路を定める時には合理的な判断を心がけ、人生を送ってきたように思うのですが、そうでなかったこともあるなど。それは、それでよかったなど。

鈴木昭男

《道草のすすめ - 「点音（おとだて）」 and "nozo mi"》

2018-19

《点音》は美術館内と敷地内に点在する12個の白くて丸いプレート。《no zo mi》は屋外展示場にある5つの階段状のもの。足とも耳とも見えるマークが目印。見つけたらたぶん乗ってみたいくなる、そんな作品です。美術館で作品に乗っていいの？ そう思われるかもしれませんが、子どもの頃、駐車場の車止めブロックのような地面から少し高いところについ上ってみたいくなりませんでしたか？ そんな気持ちのまま、ぜひ《点音》に乗って、耳を澄ましてみてください。

12の《点音》の場所の地図もご用意しています。

手に入れて探検開始です！

ガイドスタッフY



文谷有佳里 「ライブドローイングについて」

美術館のガラス面がここだけ華やか！ 2019年7月24日の公開制作で、仕上がって行く様子をお客様が直接見られるライブドローイング。一発勝負です！

黒くのびやかな線は作家の想いを乗せて高い所まで続きます。時には『そのペン書きやすいよね』などとお声もかかり、お客様との会話を楽しみながら和やかに。作品制作を通じて人とのつながりを大切にしています。私も挑戦したくなります。建築家が図面を描く様に、音楽家が作曲をする様に、描かれた作品からリズムカルなメロディーが聞こえて来るでしょう。コレクション展の入口にふさわしい作品です。



ガイドスタッフ O

宮島 達男

《それは変化し続ける それはあらゆるものと関係を結ぶ
それは永遠に続く》 1998

何のカウンター？

電光掲示板のような赤いカウンターが点滅してるよね。

まず、1分間眺めてみて。（～1分経過～）

どうでした？

0が点灯していないし、進む早さもバラバラだよ。でも実は、バラバラに見えても、カウンター同士がつながっているところがあるよ。どこかが消えると、どこかがつく数字もあって、画面全体にリズムが生まれている。人それぞれの違いや、生命のリズムを刻んでいるようにみえませんか。



ガイドスタッフ M

アンソニー・カロ 《シー・チェンジ》 1970

「鉄」といえば硬く重い工業用の材料をイメージする方が多いでしょう。1959年アメリカで見た抽象彫刻に刺激を受け、カロは鉄に赤や黄などの鮮やかな彩色を施し、台座を取り払い、軽やかで自由な形を生み出しました。新しい鉄の彫刻の誕生です。海の変化を表すタイトルの通り、明るいブルーグリーンの海、刻々と変化し、足元に打ち寄せる柔らかな波、穏やかな波の音が聞こえてきそうな感じがしませんか。お帰りの際には1階展示室入り口から外を眺めて下さい。カロの《発見の塔》が見えます。開館時からずっとここで私たちを楽しませてくれています。

みなさんは何を感じられますか？



ガイドスタッフT